

## 【研究ノート】

学習者の自伝に対する分析  
- ヴィゴツキーの概念生成の観点から -  
**The Analysis of Learner's Autobiography**  
- based on Vygotsky's Concept Development -

森 明智

名古屋外国語大学

**MORI, Akitomo**

**Nagoya University of Foreign Studies**

### **Abstract**

This article presents the analysis of autobiographies narrated by learners of English in Japanese university. The focus of this research is on a sequential change of contents and each autobiography is analyzed based on two periods, which mean the period of junior high school (including elementary school), and that of senior high school. Using the approach of text mining, the difference between these two periods is clarified. That difference is discussed based on Vygotsky's concept development. From the results, this article presents some suggestions about English learning.

キーワード：英語学習者の自伝、テキストマイニング、概念生成

Key words : learner's autobiography of English, text mining, concept development

### はじめに

本稿では、日本人英語学習者を対象にした学習者の自伝(learner's autobiography)に対して、これまでの分析手法と異なり、テキストマイニングの手法を用いつつ時期的な変化について図を用いて可視化し、その自伝内容の変化の要因については自伝研究では用いられることのなかったヴィゴツキーの概念生成の視点を用いて論じた。

## 1. 学習者の自伝に対する研究とヴィゴツキーの概念生成の理論

第2言語学習における learner's autobiography(学習者の自伝)は Benson の定義によれば“... first-person accounts of the long-term process of learning a second language”とされる(Benson, 2004)。具体的にはインタビューや記述を通じた学習者の第2言語学習についての考えを意味し、数年間をまたぐ長期的な意識変化の内容を分析に含める事ができる。

これまでの外国語学習者の自伝研究では、良い学習者像(good language learner)を見出そうとする視点(Naiman, Frolich, Stern, Todesco, 1996)や、外国語学習における学習方略を見出そうとする試み(Oxford, 1990)、あるいは外国語学習における動機の様相を見出そうとする試み(Dörnyei, 2001)が見られ、また近年では外国語学習におけるアイデンティティの変化を見出そうとする視点(Murphey, Jin, and Li-Chi, 2004)などが見られる。

本研究は特に学習者の英語学習自体に対する認識の変化に注目し、具体的には英語学習自体への概念の発展の過程に研究の焦点をあてる。学習者の自伝の分析から、学習者が様々な英語学習そのものへの考えや理解を持っている事は判明しており、先行研究において「良い学習者の特性」、「成功した学習者が持つ学習方略」などの学習を経てきた結果についての分析は進んできた。しかし、そこに至るまでのプロセスの探索や研究には未解明の部分があると思われる。本研究ではその点への分析を試みる。また筆者自身においては、英語学習の中で大学生が問題にぶつかると、自主的に解決のために思考を働かせつつ行動を起こすことができる学習者と、できない学習者との差に気づくようになり、学習者がそれら英語学習自体の理解や概念を獲得するに至った様相への分析に関心を持つようになった事も本研究の動機となっている。

また、本研究における分析の観点となっているヴィゴツキーによる概念生成の理論について言及しておきたい。子供が成長していく中で現れる概念の生成についての彼の議論は、彼の著書『言葉と思考』の第5章において語られているが、特にエリ・エス・サハロフが考案した実験の結果に準拠している。詳しい内容は割愛せざるを得ないが、22個の様々な形と色を持った積木と4つの単語が用意され、それぞれの積木には4つの単語のうちどれか1つが、積木の色や形に従いつつ一定の法則性を持って書かれている。被験者は実験者に1つずつ積木とその裏を見せてもらいながら、その法則性を見出していく。(『思考と言語』 p.436-437 訳者の註解から) 児童・子供・大人たちを対象としつつ、この実験は被験者の問題解決における論理づけや理由づけの生成の様相を明らかにできる特徴がある。

この実験において、4つの単語そのものには意味は含まれていないが、積木との関連で単語に対する概念が被験者の中で生まれていく。それらの概念形成のプロセスの結果から、ヴィゴツキーは子どもの時期ではなく特に思春期において真の概念生成が起きており、「概

念形成過程の実験的研究は、言葉あるいは他の記号を注意の能動的方向づけ、特徴の分節化、それらの抽象と総合の手段として機能的に使用することが、この過程全体に必須の基本的部分であることを示した。」と述べ、解決すべき問題が与えられる中で解決に向けて言葉を媒介した論理的思考が行われている事が概念生成の背景にある事を指摘している。(『思考と言語』 p.162) 本稿でもこの観点を用いて学習者の自伝を分析する。

以上の内容をふまえ、本研究の課題として、(1)英語学習を開始した時期から高校卒業に至るまで、インタビューによる質的データを対象にしつつその内容を小学校～中学校までの時期と高校入学から卒業までの時期の2期に分けて、その間の変化をテキストマイニングの手法を用いて図として可視化しつつ分析し、(2)その変化の理由を考察する、という2点を設定する。

## 2. 英語学習者の自伝(データ)

愛知県内の私立大学英語系学科に所属する大学生 3 名を対象に小学校～高校(大学入試終了)までの英語学習についての自伝をインタビュー形式にて語ってもらった。インタビュー協力者の選定においては、データの内容が時間的に長くなるため、十分な時間がとれる学生を選んだと同時に、大学入学後における TOEFL(ITP)、TOEIC などのスコアの上昇や校内からの留学資格を満たしていたなどの英語学習における自主的な成果を出した学生を対象に選び、研究協力についての同意の上でインタビューを語ってもらった。

また、①小中学校期における英語学習の時期と②高校期における英語学習の時期の2期に分けて分析を行ったが、データの内容からこの2期においてはインタビューの時間や語った語数において後者の方が時間が長く語数が多いという明確な違いがあった。その点から2期に分けて分析を行う事とした。

表 1

インタビューについての概要

### Interviewee 1

- ・ 英語系学科所属 大学 1 年生 A さん (筆者の大学内研究室にて)
- ・ インタビューの日時 2014 年 1 月 30 日
- ・ 全体の時間 : 1 時間 11 分 30 秒 (小学校～中学校時代について : 24 分 50 秒 高校時代について : 46 分 40 秒)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校～中学校の時期：総抽出語は 2018 語 異なり語数は 361 語</li> <li>・高校の時期：総抽出語は 4207 語 異なり語数は 589 語</li> <li>・TOEIC、TOEFL、英検など</li> </ul> <p>2013 年 12 月 (大学 1 年時) TOEIC615 (L:325 R:290) 英検準 2 級 (中学 3 年次)</p> <p>2014 年 8 月(大学 2 年時) TOEIC 645 TOEFL(ITP) 485 → 10 月 TOEFL(ITP)503</p> <p>2015 年 5 月(大学 3 年時) TOEIC 745</p>
<p><b>Interviewee 2</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語系学科所属 大学 2 年生 B さん (筆者の大学内研究室にて)</li> <li>・インタビューの日時 2014 年 1 月 30 日</li> <li>・全体の時間：1 時間 26 分 08 秒 (小学校～中学校時代について：43 分 40 秒 高校時代について：42 分 28 秒)</li> <li>・小学校～中学校の時期：総抽出語は 4421 語 異なり語数は 619 語</li> <li>・高校の時期：総抽出語は 3619 語 異なり語数は 580 語</li> <li>・TOEIC、TOEFL、英検など</li> </ul> <p>2012 年 5 月 (大学 1 年時) TOEIC 530 9 月 TOEFL(ITP) 477 英検 2 級 (高校 2 年次)</p> <p>2013 年 12 月(大学 2 年時) TOEIC 630 5 月 TOEFL(ITP) 497 → 6 月 TOEFL(ITP)520</p> <p>2015 年 1 月(大学 3 年時) TOEIC 805</p> <p>2015 年 4 月(大学 4 年時) TOEIC 820</p>
<p><b>Interviewee 3</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語系学科所属 大学 2 年生 C さん (筆者の大学内研究室にて)</li> <li>・インタビューの日時 2014 年 2 月 10 日</li> <li>・全体の時間：1 時間 11 分 30 秒 (小学校～中学校時代について：26 分 50 秒 高校時代について：44 分 40 秒)</li> <li>・小学校～中学校の時期：総抽出語は 1966 語 異なり語数は 389 語</li> <li>・高校の時期：総抽出語は 2439 語 異なり語数は 478 語</li> <li>・TOEIC、TOEFL、英検など</li> </ul> <p>2013 年 5 月 (大学 2 年時) TOEFL (ITP) 495</p> <p>2014 年 3 月 (大学 2 年時) TOEIC 560</p> <p>2015 年 1 月 (大学 3 年時) TOEIC 745</p>

大学入学後、A さんは 2015 年 9 月から 6 か月、B さんは 2014 年 4 月から 9 か月、C さんも 2014 年 4 月から 9 か月に渡る英語圏における留学を、それぞれ自らの意志で大学

内の留学資格を満たした上で決定した。また 3 名とも比較的順調に TOEIC や TOEFL のスコアを上げてきた学習者と言える。これらの点をふまえてつづつ個々の小中高における英語学習について次章で分析を行う。

### 3. 分析

分析においては研究者の主観をいったん排除し、インタビュー内容に対してコーディングソフト(KH Coder) (樋口 2014)を使用しつつテキストマイニングによる分析を行い、ある程度客観的な観点から、特に頻出語(頻繁に言及された単語)を取り出し、それらの共起関係(単語間の関連性)を取り出し、小中学校期と高校期の間の違いの特徴を分析した。

頻出語の検索においては、「うーん」「えーと」「なんか」「あ」などの感動詞、名詞の「感じ」、動詞の「思う」などの単語は頻出語になるが、分析の主眼とはならないため、分析対象から除外した。逆に「分かる」「分からない」という英語学習の理解に関わる内容は区別して結果に出るよう分析を行った。

第 4 章では、学習者 3 名について小学校～中学までの時期と高校の時期の 2 期にインタビューを分割し、それぞれに「頻出語」の表と、頻出語の間の「共起関係」を示すグラフの 2 種の資料を示しているが、その前に、テキストマイニングで言う頻出語を取り出す事やそれらの共起関係を示す事の意味について説明する。

インタビューを音声から文字データへと書き起こした後、そのままでは分析は行えない。よって、KH Coder では最初に茶筌(<http://chasen-legacy.osdn.jp>)と呼ばれる日本語の品詞分解のプログラムを用いて全ての文の中の単語を品詞ごとに分けながら抽出する。それらの単語には最も頻繁に言及された単語からあまり言及されなかった単語に至るまで頻度に応じて順位を付ける事ができる。よって頻出語を見ていく事はそのインタビューの特徴を捉える指標となる。

しかし頻出語を見るだけでは、それらが他の単語との間でどのような関連を持っているのか不明である。よって、1つの文の中にどのような単語が同時に表出されたのか(これが共起(co-occurrence)と呼ばれる)を分析する必要がある。複数の文の中で何度も出てきた共起関係(同時に出てきた単語)は当然関連が強いため、それらもインタビューの特徴として捉えられ、1つのグラフとして描く事が可能になる。

グラフの見方については、グラフ中のより大きな円で描かれている単語は頻出の度数が高かった事を意味している。頻出度に加えて他の単語との関連の深さは見るため、単語と単語の間を結ぶ線が指標となる。線が太い場合は、その両者の単語の共起の度合いが高かった事を示す。さらに、複数の単語間を線でつなぐことでグラフが出来上がるが、その中

心性を探るために本稿では次数中心性に着目している。簡単に言えば、より多くの単語との共起関係が深かった単語を自伝内容における中心性が高いとして計算し、より中心性が高い単語から低い単語へとインクの濃淡の差が付いている。濃い部分がより中心性が高く、薄くなるに従い中心性が低くなる。(金, 2009)

分析例を示すと以下ようになる。仮に、「太郎は砂浜でボールを蹴っていた。砂浜でボールを蹴ることは彼の日課になっていた。砂浜での運動は足腰を鍛える意味があったのだ。」という3つの文から成る文章があったとすると、まず形態素解析から、以下ようになる。

1 太郎 / は / 砂浜 / で / ボール / を / 蹴っ / て / い / た / 。

2 砂浜 / で / ボール / を / 蹴る / こと / は / 彼 / の / 日課 / に / なっ / て / い / た / 。

3 砂浜 / で / の / 運動 / は / 足腰 / を / 鍛える / 意味 / が / あっ / た / の / だ / 。

これらを頻出語順に並べると以下ようになる。

砂浜	3	蹴る	2	運動	1	太郎	1	鍛える	1
ボール	2	意味	1	足腰	1	日課	1	ある	1
								なる	1

ここから、出てきた語を横軸に、それぞれの文を縦軸にとり、文に対して出てきた単語に対して1、出て来なかった単語を0とする。すると、全ての文を1か0の2値データとして大きな行列式を作ることができる。

	砂浜	ボール	蹴る	意味	運動	足腰	太郎	日課	鍛える	ある	なる
1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0
2	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1
3	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0

テキストマイニングとは、インタビューや自由記述をこのような行列として読み替えて分析を行う事と思って良い。このように見ると「砂浜」という言葉は「ボール」「蹴る」と共起間関係が深く、「意味」「運動」「足腰」などの単語とも共起関係がある。このようにして相互の関連の深さの度合いを考慮しつつグラフを描く事ができる。

## 4. 結果

### 4.1 Interviewee 1

表 1

A さんの小中学校期における英語学習の頻出語（単語の右のセルは出現回数を示す。）

英語	11	先生	6	出る	5	文法	5
分かる	7	好き	5	書く	5		
テスト	6	受ける	5	小学校	5		

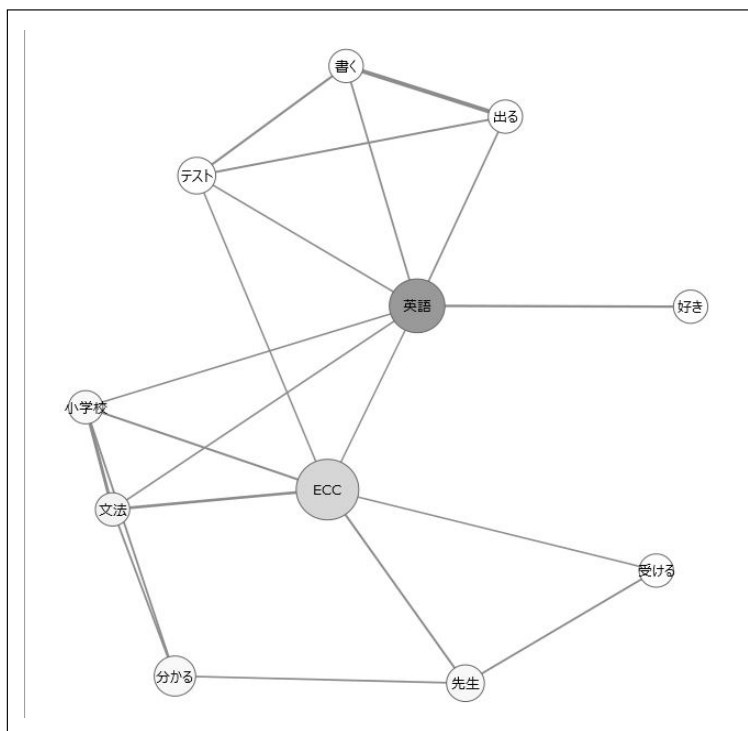


図 1 A さんの小中学校期における英語学習の頻出語の共起関係

頻出語の結果から、小中学校期における A さんの英語学習には「難しい」「分からない」などの単語は見られず、「分かる」「好き」などの単語が頻出語として上がっている。

共起関係を示すグラフから、中心性が高い単語は「英語」と「ECC(小学校時代から通っ

ていた)」になっており、「好き」「分かる」「先生」「文法」などが共起の単語として挙げられている。

・インタビューからの抜粋

「... そんな、英語でめっちゃ苦労した記憶はない…。中学校は。英語は…。好きだったし。」

「... 読めなくなることはない。無かった。うん、英語は... 好きだったし。」

表 2

A さんの高校期における英語学習の頻出語

読む	17	自分	10	学校	7	区切る	6
単語	16	書く	10	見る	7	使う	6
文法	15	問	10	高校	7	塾	6
覚える	14	難しい	9	最後	7	前	6
先生	13	授業	8	分かん	7	長文	6
センター	12	出る	8	聞く	7	買う	6
時間	12	本文	8	予習	7	分かる	6
英語	11	コツ	7	テスト	6	勉強	6
						本当に	6
						問題	6

高校期では A さんの自伝には「読む」「単語」「文法」「覚える」などの言語学習に関連する表現が頻出語として上位に来ており、この点は小学校～中学校までの頻出語の内容とは異なると言える。

さらに「自分」という言葉や「難しい」「分かんない」などの単語は、小中学校の時期には見られなかった言葉であるが、高校期の英語学習の自伝の中では頻出語の上位に来ている事が分かる。







Bさんの小中学校の時期には既に「先生」「言う」「書く」「聞く」「読む」などの言語習得に関連する表現が頻出し、「分からない」「自分」「難しい」などの言葉も頻出語として出ている。（「受験」「高校」という単語が出ているが、実際にBさんは英語の専門科を持つ私立高校を受験し英語についても受験勉強をしている。）

共起関係においては、最も中心性が高い語は「分から(ない)」という単語であり、それに対して「難しい」「問題」などが強い共起関係を伴って現れている。「読む」も中心性が高く、そこに「受験」が強い共起関係を伴っている。「言う」「シャドウイング」「得意」という単語も共起関係を伴っている。

・インタビューからの抜粋

「中学では、正直、先に英語やったのもあって、簡単だったんです…」

「私立の高校の英語の、私立高校受験するための問題のやつを買って…」

「問題集買いました。誰かに言われたわけじゃなくて自分で。めっちゃ難しくて大嫌いでした。… 難しかったです。」

表 4

Bさんの高校期における英語学習の頻出語（数字は左の単語の出現度数）

先生	18	塾	10	学校	8	スラッシュ	6
リーディング	17	分かる	10	受ける	8	リスニング	6
読む	15	文法	10	受験	8	課題	6
授業	14	クラス	9	人	8	行う	6
教える	13	行く	9	言う	7	高校	6
良い	12	単語	9	自分	7	前	6
難しい	11	英作	8	全部	7	多い	6
国際	10						

Bさんのインタビューでは、高校の時期に入り「先生」「リーディング」が最頻出語として表れ、「読む」「授業」「教える」などの単語が頻出している。「難しい」という単語も現れ「塾」という単語も登場手している。

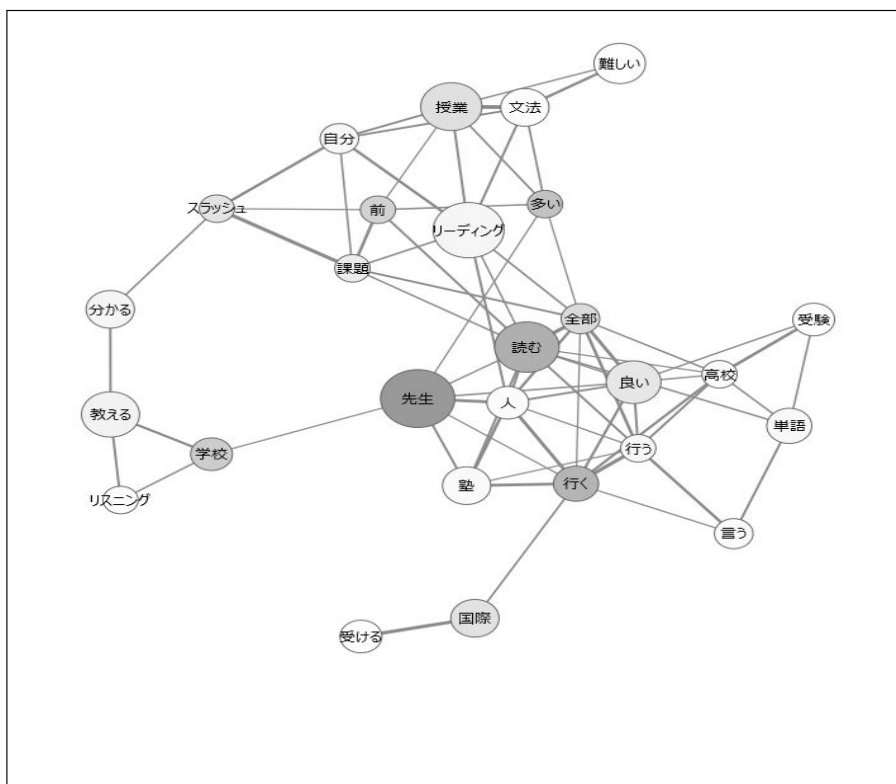


図4 Bさんの高校期における英語学習の頻出語の共起関係

中心性が高い単語はやはり「先生」「読む」であり、「学校」だけでなく「塾」との関連も深い。「授業」に対しては「難しい」「文法」「自分」などの単語と関連が深い。

・インタビューからの抜粋

「難しくって、その問題が、その問題集の。解説も難しかったです。なんか難しかったな一って。先生に聞いてましたし、英語ができる人が多いので...」

「その文法に関して、文法が難しかったので。文構造が難しかったです。それを感じるようになりました。...自分でスラッシュとか入れないといけなかったんで。構造を分析してっていう...」

「その先生、本当に、とても良い先生だった、... レベルの高い先生が多くて、講師が。効果はありました。読み方を教えてもらった」

### 4.3 Interviewee 3

表 5

Cさんの小中学校期における英語学習の頻出語 (数字は左の単語の出現度数)

塾	21	学校	7	見る	6	文法	5
単語	11	書く	7	テスト	5	勉強	5
覚える	10	小学校	7	英検	5	無い	5
分かる	10	科目	6	個人	5		
先生	8	嫌	6	授業	5		

Cさんの小中学校期の最頻出語は「塾」であり、「単語」「覚える」「分かる」などの表現が頻出語として出ている。実際にCさんは小学生の時から塾(地元の個人塾に通っていた)において英語に触れていた。

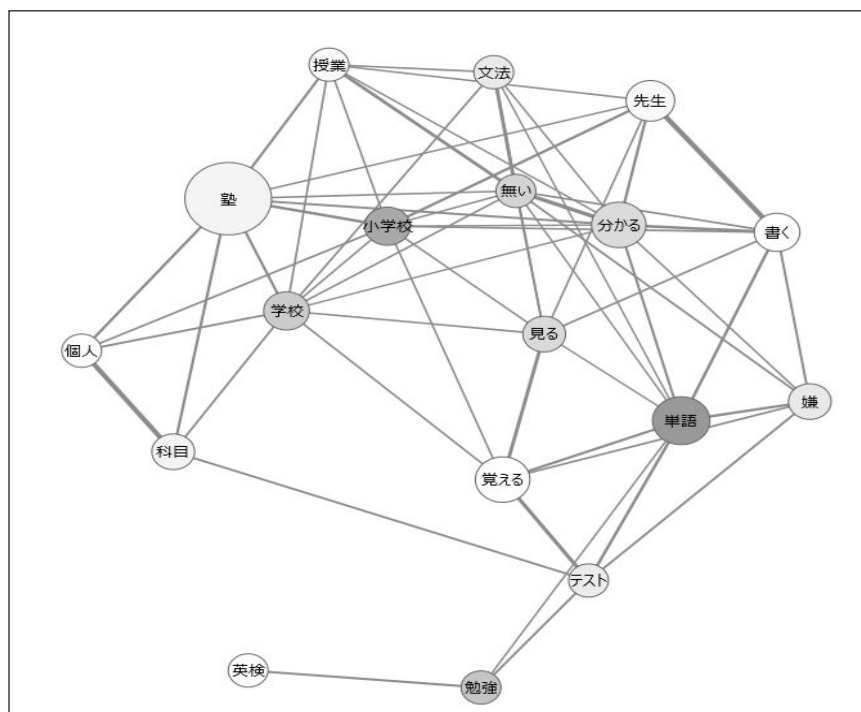


図 5 Cさんの小中学校期における英語学習の頻出語の共起関係

共起表現からは「単語」「小学校」が共起の関連が深い中心性の高い単語として出ており、「塾」「分かる」などの単語において共起関係が深い。単語を「覚える」については「嫌」という単語と関連している。

・インタビューからの抜粋

「小5から、元の個人塾みたいな所、英語専門の、そこへ友達が通ってたんで、便乗して...」

「分からなくなっていくときは無いです。たぶん、私は学校の授業より、塾で、学校の先行ってたんで。文法とかは先の事やって...」

「単語が増えてきたのは苦です。その時は、ただ単語だけ覚えてたんで、... 単語だけ覚えてもつままないじゃないですか。単語だけ覚えるのは嫌でした。つまんなかった。テストの時しか覚えられないです、」

表 6

Cさんの高校期における英語学習の頻出語（数字は左の単語の出現度数）

書く	15	部活	9	長文	7	出る	6
見る	12	分かる	9	怖い	7	人	6
分かん (ない)	12	行く	8	問題	7	単語	6
塾	10	終わる	8	解説	6	付箋	6
先生	10	覚える	7	高校	6	勉強	6
文法	10	授業	7	時間	6		

Cさんの高校時期においては、「書く」「見る」などの言語学習に関連する単語が頻出語として挙がっている。それらに続いて「分かん(ない)」という単語が「分かる」よりも上位に来ている。続いて「塾」「先生」「文法」などの単語が頻出語として続いている。



## 5. 考察

英語学習者の小学校～中学期および高校期の 2 期における自伝を比較しつつ、および大学入学後における彼らの TOEFL、TOEIC のスコアや留学資格取得の経験を考慮することにより以下の事が考えられる。

- (1) 学習の初期段階：自らの意識的な学習行動がそれほど必要でない段階。(単語や例文などが「分かる」「英語が好き」という段階であり、それらに準ずる語が頻出となる段階。私立難関高校受験などの経験を除けばインタビューにおける語数が多くならない。)
- (2) 受験期や高校の時期：その時点における自分の力では解決できない困難さや難しさに直面する段階。(「分からない」「難しい」という感じる段階であり、それらに準ずる語が頻出となる。)
- (3) 問題解決のために意識的な学習行動の必要性を感じ問題解決のための行動を始める段階(「単語帳を買って取り組む」「自分から講座を履修する」「自分の予習だと分からない所は授業で聞く」「先生や塾などに支援を求める。」「スラッシュリーディングなどの読み方を学ぶ」などの段階。インタビューにおける語数が多くなる。)
- (4) 大学入学以降においても自分の意志で英語学習における課題の解決を随意的に行う段階(英語学習そのものへの理解や考えが学習者の中にあるため、新しい問題解決にも応用されていく段階)

これらの段階をヴィゴツキーの概念生成の観点から見ると、英語学習に対する概念の生成のプロセスとしてとらえることができる。ヴィゴツキーは少年を対象にした思考をたどる実験を行う中で、概念生成の観点について「概念の形成は、…基本的課題の解決においてその手段としての役割を演じる目的志向的過程のタイプだということになる。言葉の暗記やそれと物との結合それ自体は、概念の形成をもたらさない。この過程が発生するためには、被験者の前に、概念を形成することなしには解くことのできないような課題が発生しなければならないのである。」(『言葉と思考』 p.152)と述べているが、単なる単語などの暗記の段階から、それだけでは解決できない問題や課題が現れ、さらにそれらに対して、解決という目的志向を持つ意識が芽生えた時に概念が形成される事を指摘している。この観点は英語学習に置き換えるならば小学校から中学校における単語や例文を覚えれば試験などで結果を出せた段階から、高校および大学受験期を迎える中で、単なる暗記では解決できない文法問題や英語長文などに意識的に取り組む中で、英語学習そのものへの概念が形成され始めると解釈できる。

あるいは、「概念形成の過程は... この過程において中心的なものとなるのは、少年が自



分の行う心理的操作を自分自身の支配下においたり、自分自身の心理過程の流れを制御し、その活動を自分の前に立てられた問題の解決に方向づけたりするときの助けとなる手段として、記号あるいは言葉を機能的に使用する事である。」(『言葉と思考』 p.163)とも述べられているが、意識的な問題解決への思考の中で英語学習への言葉を用いた論理的な捉え方が形成されてくると解釈する事ができる。

現時点では大学生が述べる自伝であるため詳細な部分は不明な部分もあるが、学習者は言葉やあるいは例文の暗記という形での学習段階をまず経験する。それを基礎としつつ、それだけでは越える事のできない課題が現れた時(例：難解な長文、時間制限)、その解決のために意識的な心理的操作を行う中で、英語学習に対する概念が生まれてくるのではないか。それが後々随意的、意識的に使用できる概念として、大学における英語学習の問題解決にも応用され得ると結論づけられうる。

## おわりに

自分の力では簡単に解決できない問題を前にしつつ、解決のための思考が生まれるとれすれば、以下の提言が考えられる。

・学習者の思考は段階を経ていくため、その点をふまえた指導が必要になると思われる。学習の初期段階では意識的な問題解決への概念や思考は表れず、例文や単語などを覚えていく段階と言える。(一般的な表現を使えば比較的 naturally に英語を習得する段階でもある)しかし、その段階からさらに高度な段階に移り自分の力だけでは超えられない問題が出てきた時、英語学習そのものへの理解が必要となる段階となる。これらの段階をふまえた指導が必要となるだろう。

・その意味で、単一の指導方法があらゆる段階の学習者に対して有効であるとは言えない可能性がある。学習初期の段階にある学習者に、英語学習への概念を持つ事を要求する事は適切でない可能性がある。あるいは、初期段階を終えつつある学習者に、難解もしくは高度な内容を与えて考えさせるという機会を与えない事は、更なる英語の運用能力を伸ばす上で適切でない可能性がある。

本研究の今後の課題としては、以下の点になる。

・本研究ではデータの量が3名と十分ではないため、さらに多くのデータをふまえた上で仮説の検証が必要となるだろう。その際にはテキストマイニングによるさらなる分析方法が必要となると思われる。

・英語学習を進める中で、困難さ、難しさ、分からなさ、に直面する場合の学習者の意識

に対してさらに詳細な変化に着目する必要がある。例えば、過去の問題解決の記憶の呼び起こし、推測、質問としての発言や発話、結果の検証、習得内容としての定着、などの段階が考えられる。更なる検証を進めていきたい。

注

<sup>1</sup> 本稿は 2015 年 6 月 20 日に JACET 中部支部大会において行った研究発表を元に加筆、修正したものである。

## 参考文献

- ヴィゴツキー（柴田義松訳）（2001）『思考と言語』新読書社。（Лев Семенович Вьготский（1934）*Мышление и Речь*）
- 金明哲（2009）『テキストデータの統計学入門』岩波書店。
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。
- Benson, P. & D. Nunan. (Eds) (2004). *Learner's Stories*. Cambridge
- Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Harlow: Longman
- Murphey, T & Jin, C. and Li-Chi, C. (2004). *Learner's construction of identities and imagined communities*.
- In P. Benson, & D. Nunan (Eds) *Learner's Stories* (pp. 83-100) Cambridge
- Naiman, N & Frolich, M. & Stern, H. H. & Todesco, A. (1996). *The Good Language Learner*. Multilungula Matters Ltd.
- Oxford, R. L. (1990). *Language Learning Strategies*. Heinle & Heinle Publishers